

モスル近郊の前線基地に配置されたクルド治安部隊



共同通信

イスラム国 (IS) の勢いは、米軍をはじめ有志連合による2000

回超の空爆を受けたにもかかわらず、なかなか衰えないように見える。イラク軍やクルド軍も、2014年6月にISに占拠されたイラク第2の都市モスルを奪還できないどころか、15年5月にはイラク西部のラマディを占拠されてしまった。ISが14年6月29日に「国家」樹立を宣言してから1年が経過した。有志連合の攻撃を受けても、ISは敗北しそうでしない。占拠した都市をなぜ占領し続けることができるのか。また、米軍や有志連合はどうしてISを壊滅できないのだろうか。

主要経路を制圧

ISは13年8月以降、シリアやイラクの都市に攻勢を掛けている。同月には、まず、シリア北西部アラッポ近郊のシリア空軍基地を制圧

(図の①)。軍事物資や兵器を奪取するとともに、航空面での劣性を回復した。同12月にはラマディに侵攻。14年1月にこのラマディとファールージャを占拠した(②)。

この時点で、シリア南部や中部からイラクのバグダッドに至る2本の経路を確保したことになる。同3月にはサマッラを攻撃(③)、同6月にモスルを複数回攻撃し(④)、両都市を陥落させた。これにより、シリア北西部からチグリス川沿いにバグダッドに至る経路を制圧。同6月にはタルアファル(⑤)からバクーバまで進撃し(⑥)、その近郊のバイジの油田施設を獲得している。

その結果、シリア北部からイラクに至る経路をもう一つ制圧した。同月、イラク戦争の際に「キャンプ・アナコンダ」として知られたバグダッドに至る計四つの主要な経路を制圧するとともに、重要な石油資源を獲得したことになる。シリアの占領地からイラクのバグダッドに至る経路をおおむね制圧し、軍事拠点や石油資源を確保したことを受けて、ISは14年6月に「国家」樹立を宣言したのである。

ISは、シリア軍やクルド軍、イラク軍と同時期にいっせいに向き合うことはない。個別に対峙する場合には、勝利できるだけの十分な戦力を用意して集中的に短期間で攻撃を仕掛けている。例えば、イラク軍と戦う時には、クルド軍やシリア軍とは小競り合いにとどめるようにし、敵方をその地に縛り付けて兵力を分散させるようなこともする。

逆の見方をすれば、イラク軍やクルド軍、シリア軍はそれぞれ個別に作戦活動を進めており、連携が十分に取れていないということだ。有志連合による空爆も、これら各軍の攻撃や防御とうまく協力できていない。ISは、こうした弱みを突いて攻撃を仕掛けているのであり、有志連合や各軍がISに有効な打撃を与えることができない理由であると言える。

シリアからイラクのバグダッドに至る主要な四つの経路についても、ISは一度にはなく、一つずつ制圧していった。その間、戦力を集中させている経路以外の都市や経路のISの攻撃力や防御力は落ちるが、そもそも、イラク軍やクルド軍には都市を死守する気概や戦闘能力が欠けている。このため、ISの攻撃を受けると、兵器や弾薬、車両、燃料などを残したまま逃走することも少

# IS占拠がしぶとい理由 ナポレオンも使った高等戦術

イスラム過激派組織「イスラム国 (IS = Islamic State)」は、単なるテロ集団ではなく、本格的な戦術を駆使する戦闘集団だ。

にしむら きんいち  
西村 金一  
(軍事・情報戦略研究所長)

これに対し、米軍が同8月にイラクのIS支配地域に空爆を開始したのは、イラク軍が敗北を続けていることに危機感を持ったためだ。同9月にはシリア北部にあるクルド人の拠点都市コバニを攻撃。米国内主導の有志連合も同月、シリア国内でも空爆を開始した。15年1月にはこのコバニを奪回。さらに同3月にはイラク中部のテイクリートを奪還している。

自衛隊教範でも紹介

ISの戦い方を概観すると、軍事的に「内線作戦による各個撃破」と呼ばれる特徴が見られる。内線作戦とは、複数方向から求心的に攻め寄せてくる敵方に対し、複数の敵方の中間地点で迎え撃つものである。味方の移動距離が短くて済むうえ、敵方が兵力を分散させたタイミングを捉えて敵方の個別部隊をそれぞれ集中的に撃破できるメリッ

なくない。その結果、ISに奪取され、戦うたびにISが戦力を増大させることにつながっている。内線作戦の利点を生かした合理的な戦い方だと言えよう。ISの攻撃は、単なるテロ集団のそれではなく、組織的で体系的な国家による通常の戦闘に匹敵するものだ。こうした戦い方ができる能力を持つ指揮官や作戦参謀、さらにその命令に従って動く部隊を備えているということだ。

兵力の優越性生かせ

内線作戦を取るISを撃破するの

は容易ではないはずだ。ただし、それ以前に、米軍や有志連合が攻めあぐねている現状を見る限り、ISの戦術や戦法がどんなものであるのか、そしてそれにどう対応するべきかを十分に考えて実行できるレベルに至っているようには思えない。内線作戦を取る敵方を打ち破るためには、参加軍全ての連携や協力が不可欠だ。特にISの兵力には限界がある。攻撃にあたって戦力を集中させる傾向があるため、同時に複数方向から実施される攻撃には弱い。そこで、イラク、クルド、シリアなど各軍や米軍、有志連合は、ISが内線作戦の利点を使うことができなくなるよう、一斉に戦いを進める必要がある。うまく連携や協力が取れば、戦闘体制や兵力の優越性をフルに生かすことができる。

時期や場所を移して敵方の兵力を分散



(注) 攻撃の方向については情報不足もあり、経路と占拠地域を基に図示した (出所) ロイターなど報道や各種資料を基に筆者作成

国同士、あるいは異なる民族間の軍隊が共同作戦を進めるのはそう簡単なことではない。現状では、例えばイラク軍内部でさえ、十分な連携が取れているようには見えない。しかし、手をこまねいていては、ISの勢力範囲は今後も広がるばかりになるだろう。